

〔学校給食需要に応えるための主要野菜の品種特性把握と出荷拡大技術〕  
冬春まき（12～2月）ニンジンの播種日およびトンネル被覆が規格株収量に及ぼす影響

海保富士男・沼尻勝人\*・遠藤拓弥\*<sup>2</sup>・野口 貴・蜷木朋子・徳田真帆  
（園芸技術科）\*現調整課・<sup>2</sup>現小笠原農セ

【要 約】12月上旬～2月中旬に播種するニンジンの冬春まき栽培では、200g以上の給食規格株を5～6月に収穫するためには、「彩誉」を用いて透明マルチを敷設し、穴開けの手間と再利用可能なことから、ユーラックカンキとベタロンのトンネル2重被覆を行う。

【目 的】

昨年、2月下旬播種の春まきニンジンでベタロントンネル、黒マルチの使用によって6月中旬以降に200g以上の規格株を収穫できた。さらに、4～6月に規格株を収穫するため、ユーラックトンネルや透明マルチが冬春まきニンジンに及ぼす影響を明らかにする。

【方 法】

「彩誉、愛紅」を供試し、2020年12月10日、2021年1月4日、1月19日、2月4日、2月18日に透明マルチ9515を敷設したベッドに播種し、パスライトのべたがけを行った。処理区は、ユーラック（穴なし）のトンネル被覆（Y区）およびユーラックカンキ4号（4穴）とベタロンDT-650のトンネル2重被覆（YK+B区）の2区を設けた。Y区では2月下旬からトンネル上部に換気用の穴を開け、適宜その穴の数を増やした。トンネルは4月12日に除去した。播種後日数が概ね120、130、140、150日に各区25株ずつ収穫した。

【成果の概要】

1. 厳冬期（1/13～27）のトンネル内の気温は、いずれのトンネル被覆区も夜間の最低では外気と同等の-1℃まで下がり、日中の最高では外気の12℃に対しY区で9℃、YK+B区で7℃ほど高くなった（図1）。地温は、朝方の最低時で両区とも外地温より3から4℃ほど高くなり、日中の最高時ではY区で10℃、YK+B区で7℃ほど高くなった。
2. 12月10日播種では、4月28日収穫の「彩誉」ではいずれの被覆区とも規格株率が70%以上、規格株収量も4t/10a前後になった（図2A）。これに対し「愛紅」では、規格株率が37～55%と低く、収量も3t/10aに届かず、とくにYK+B区で低かった。しかし、5月10日では、いずれの品種、被覆区でも規格株率80%以上、収量5t/10aに達した。
3. 1月4日播種では、5月13日の「愛紅」のYK+B区で64%、4.4t/10aと低かった以外、「彩誉」および5月24日の「愛紅」のYK+B区で100%、6t/10aを超えた（図2B）。
4. 1月19日以後2月4日、2月18日の播種では、いずれの品種、被覆区でも播種後120日以降の収穫で規格株率95%以上、収量6～11t/10aに達した（図2C、D、E）。
5. この時期に問題となる抽台は、1月19日以降播種の「愛紅」で収穫期間中に150株当たり1～3本発生したが、「彩誉」で抽台株の発生はなかった（データ省略）。

【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 規格株を4月から収穫できるように、さらに早い11月下旬播種の冬まきを検討する。
2. トンネル被覆およびマルチ敷設により地温が露地より高くなるので、マルチ下でネキリムシが発生し被害が出るので、土壌消毒や播種前～生育期の粒剤施用を行う。

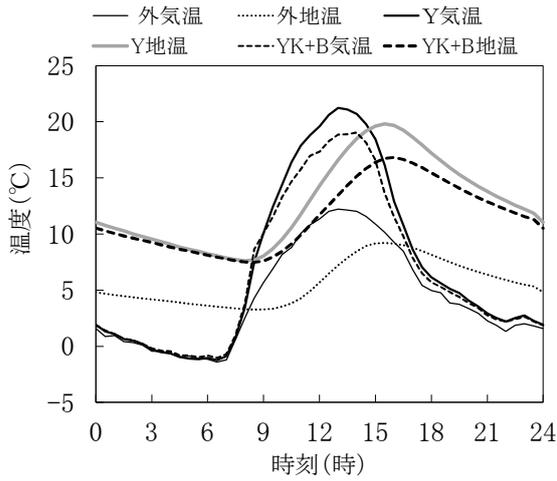


図1 気温および地温の日周平均値  
 (2021/1/13~27, 深さ5cm)

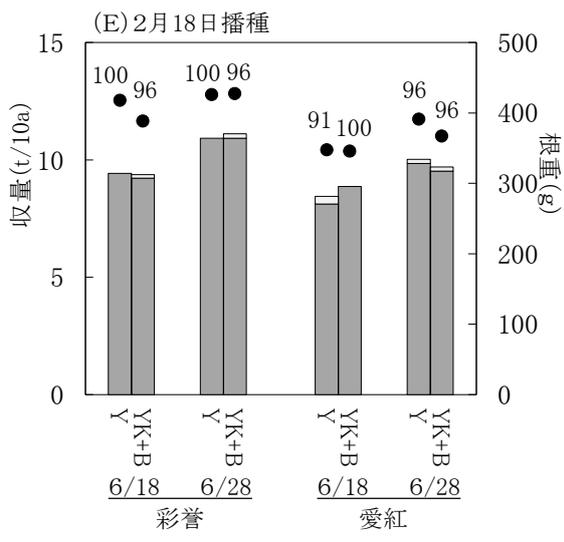
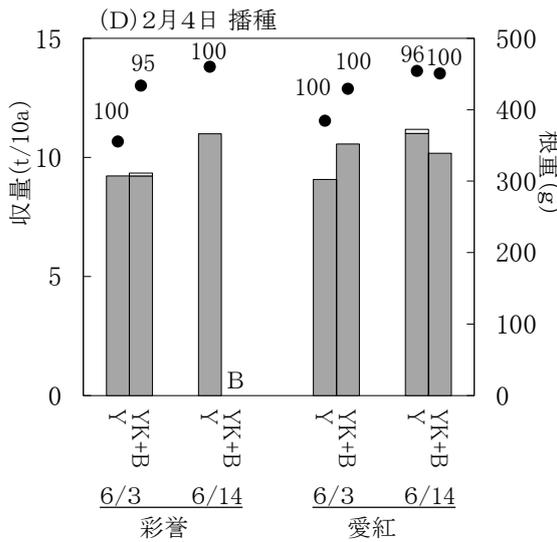
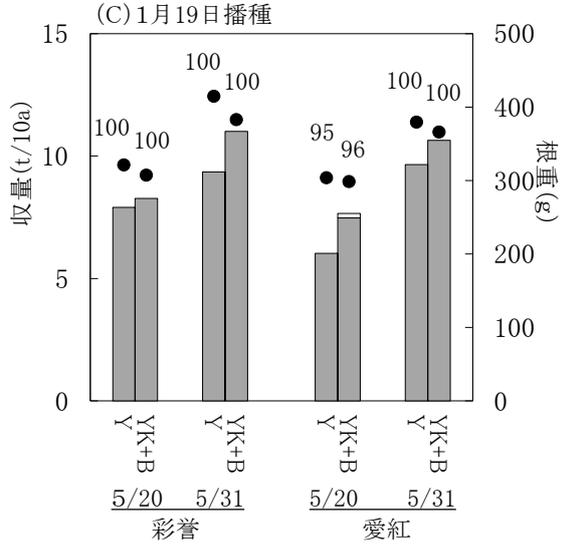
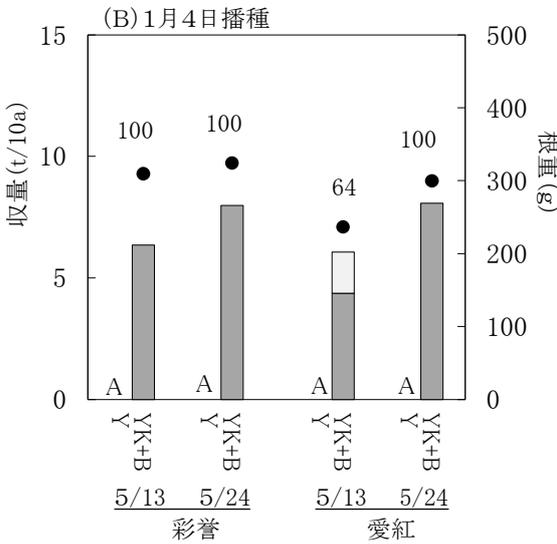
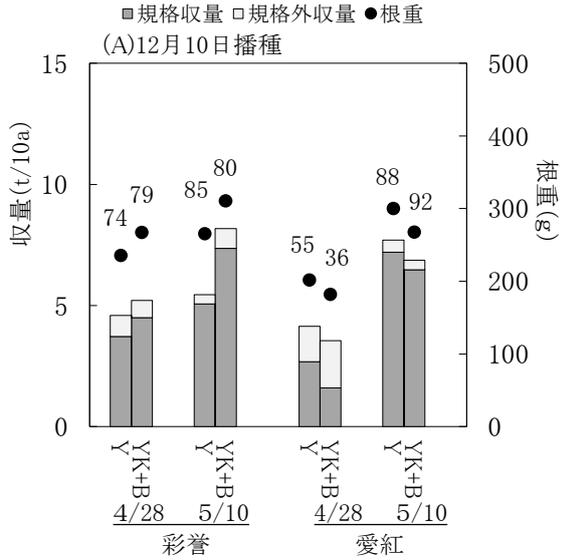


図2 規格株率, 根重および収量に及ぼす被覆資材の影響

棒の上の数字は規格株率(%) = 規格株本数(本) / 収穫本数(本) × 100

Y: ユーラック(穴なし)

YK+B: ユーラックカンキ4号+ベタロンDT-650

欠測値: 1/4播種Aはネキリムシ被害, 2/4播種Bは灌水不足による発芽不良